

### 巨大墳墓の時代

墓は、死者を埋葬するという意味においては、旧石器時代から存在したことに相違ない。恐らく腐敗する遺骸を目の当たりにしてその始末を迫られたという現実的意味とともに（旧石器時代は移動を繰り返しており、未だ定住社会ではないため、上の意味は今日ほど大きな意義を持たなかったであろう）、シャニダール洞窟の死者に添えられた花束から理解できるように、哀悼・追悼の情の発露としての墓が考えられるのであり、そこに他の動物にはない人間独自の感情が窺えるのである。

ところで、今日に至る人の歴史の中でも、最も墳墓を大きく立派に見せようとした時代が古墳時代である。もちろん、古墳の中には様々な形態や規模の差が認められている。しかし、甲斐鉾子塚古墳のような 100m を遙かに超える規模を持つ古墳はもちろん、今日考古学者が小規模墳と呼ぶ直径 10m 程度の古墳でさえ人を埋葬する墓という意味では十分に巨大である。このような古墳の規模に見る特徴から、権力の誇示や身分表現としての存在意義、つまり古墳の有する政治的意義に焦点を絞った研究が盛んである。

もちろん、このような観点は相似形古墳の存在や規模と副葬品の差が概ね相関関係にあることなどから認められるのである。しかもこうしたありようは、今日に至るまで継続している。江戸時代において身分と埋葬施設（外部の諸施設もこれに倣う）が密接な関係にあることを谷川章雄は見事に復元している。今日においても、韓国では郷里（本貫地）に墳墓を営むのが通例であるが、成功者の墓は非常に大きく立派であることが多い（この点、今日の日本では別種の考え方によって異なった墳墓が模索されている。しかし、鎌倉にある堤康次郎の墓は極めて広大な敷地内に存在することで有名である。堤の墓にも別の存在意義が認められるが、これらについては後述する）。

しかし、古墳の規模に見る巨大性について、権力の誇示や身分表現としての存在意義のみで説明がつくものであろうか、という疑問が浮かぶ。もちろん、後継者のパフォーマンスとしても大型古墳を築造する、あるいは被葬者の生存中に準備することが、一定の意義を有することについて容易に理解できよう（仁徳天皇の陵墓築造説話など）。それ故、上述の通り、江戸時代に至ってもそうした構造が認められるのである。しかし、それらの存在意義の誇示については、被葬者の生存中こそ望ましく、居館を大きく立派にする方が遙かに現実的ではないだろうか。すなわち、権力の誇示や身分表現としての存在意義を否定するのではなく、他にも別種の存在意義が複合的に考えられるのではないだろうか。本日は以下、こうした観点から古墳を例に取り、大型墳墓の存在意義について考えることにしたい。その際、そうした意義が古墳時代に特有のものであるのか、あるいは今日に至る歴史の中で通時的に有するものであるのか、概観して墓の持つ本質について考えようと思う。また、社会の変化が墓の意義とどのように関連するものであるのかという問題についても考えようと思う。

### 巨大古墳の存在意義

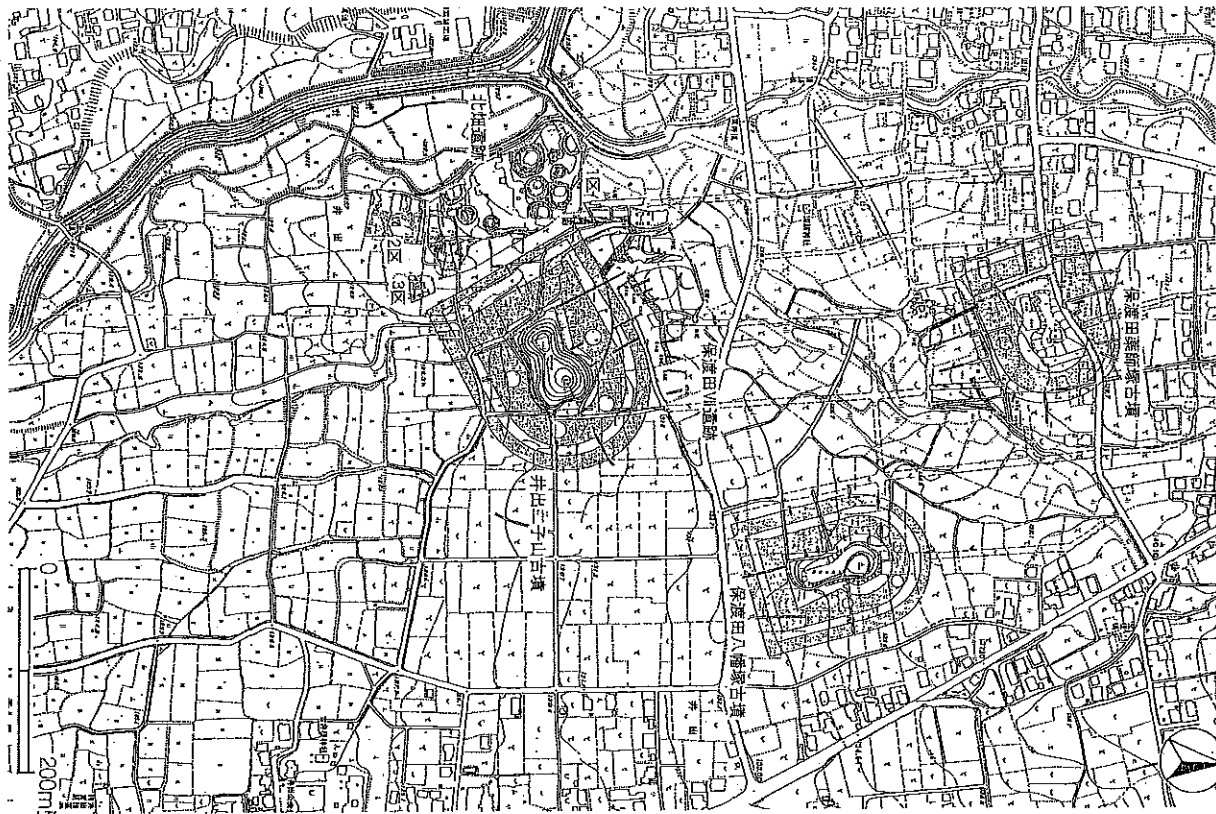
#### ① 権力の誇示や身分表現

- ② 公共事業の側面＝反対給付
- ③ 儀礼的側面＝「共同幻想」の演出としての巨大古墳
- ④ 精神的世界の具現化
- ⑤ 社会的意義

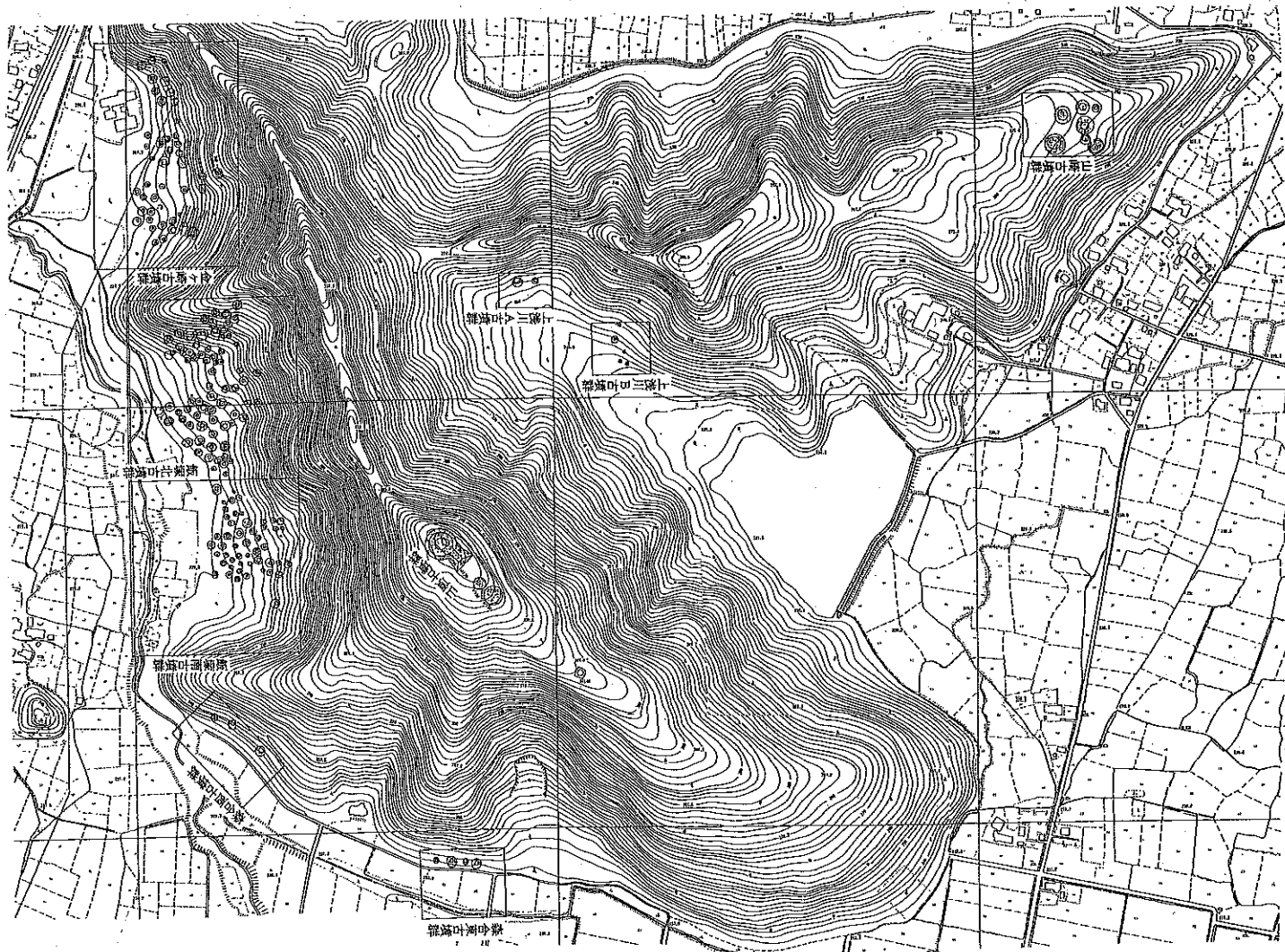
上の諸側面について考究する。特に⑤についてはこれまで見落とされてきた側面であり、こうした面を中心に考えようと思う。

#### 社会的側面の諸相

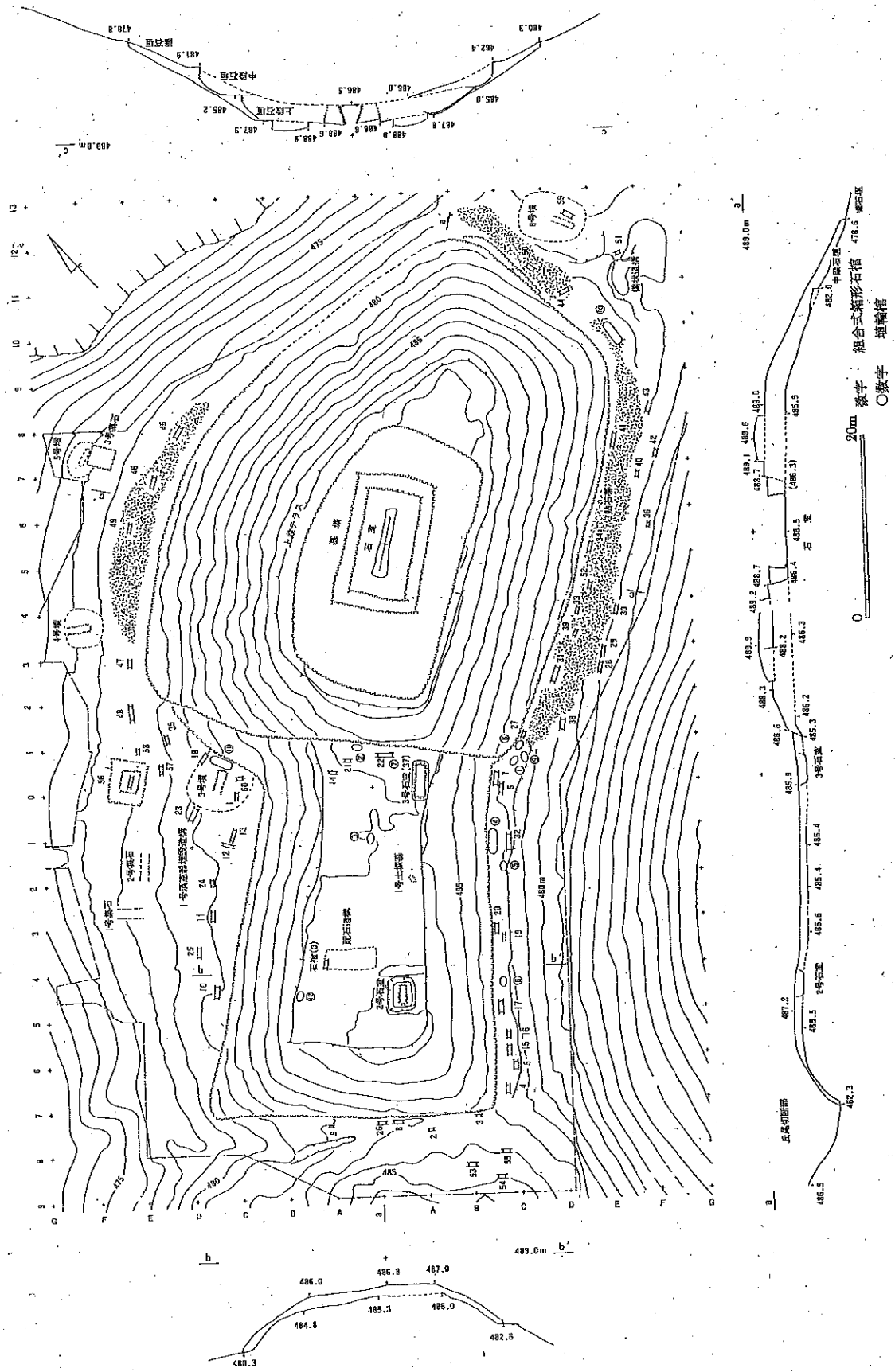
社会学者の嶋根克己によれば、墓には四つの要素があるという。つまり、①単純に死体処理の場、②社会経済的な継承、③社会関係の修復・継承、④記憶の共有である。このことを念頭に置いて、今日何故大きな変化が生じているのか考究したい。今日、何故墓に対する考え方に大きな変化（自由葬といってこれまでの考え方にとらわれず、墓を持たない埋葬法や家系にとられない墓のあり方など、以前とは全く異なる墓のあり方が模索されている）が認められるのか、考える。それによって墓の本質について考えたい。



井出二子山古墳（高崎市）と隣接する小古墳



戸塚山古墳群（総称・米沢市）と構成古墳群の分布—上が北—



森將軍塚古墳（千曲市）と内部主体

## ①石室石槨墓

銅棺・木棺 将軍<増上寺>

木棺 将軍正室・側室<増上寺>

## ②石室墓

木棺 下総結城藩主松平家(15万石)(栩木 1994)

越後長岡藩主牧野家(7.4万石)<済海寺>

上野館林藩主秋元家(6万石)<寛永寺護国院C1・69>

甕棺 将軍側室<増上寺>

紀伊和歌山藩主徳川家(55.5万石)<寛永寺護国院A17>

出羽新庄藩戸沢家(6.7万石)(河越 1965)

## ④木炭・漆喰(石灰)床・槨木槨甕棺墓

上野館林藩江戸家老、用人矢貝家(700石のうち400石)<寛永寺護国院C61-1・2・5>

旗本大久保家(5,000石)<寛永寺護国院BⅡ19・23~25>

## ⑤方形木槨甕棺墓

高家畠山基徳再室(4,000石)(港区立港郷土資料館 1987)

上野館林藩江戸家老、用人矢貝家(700石のうち400石)<寛永寺護国院C61-3・4>

旗本大久保家(5,000石)<寛永寺護国院BⅡ10-1・13・26・31>

旗本秋元家(4,000石)<寛永寺護国院BⅡ9-1~4>

旗本三井家(1,200石)(東京都港区教育委員会 1992)

播磨龍野藩士近藤甫泉(120石)(東京都港区教育委員会 1992)

## ⑦甕棺墓

旗本三枝監物守興(興)(400俵)<自證院57>

旗本佐藤家(300俵)<寛永寺護国院BⅡ11-2・3・5>

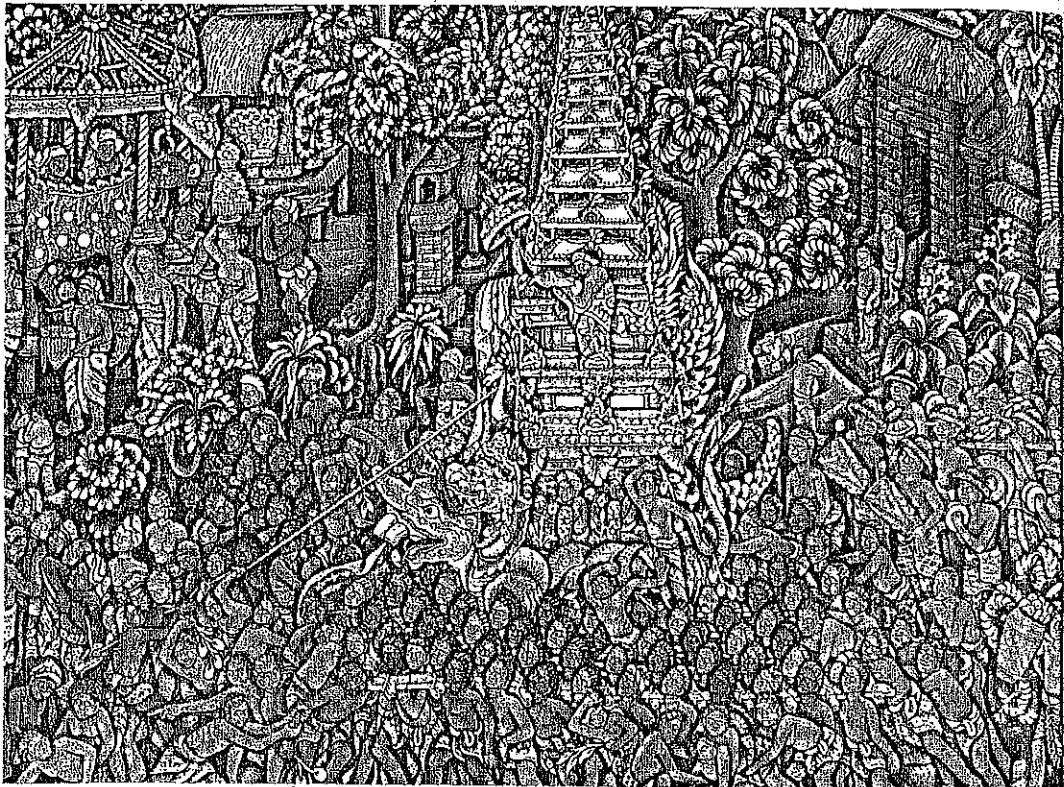
旗本深見家(200俵)<寛永寺護国院C103-1~3>

旗本犬飼家(70俵3人扶持)(港区立港郷土資料館 1989・東京都港区教育委員会 1992)

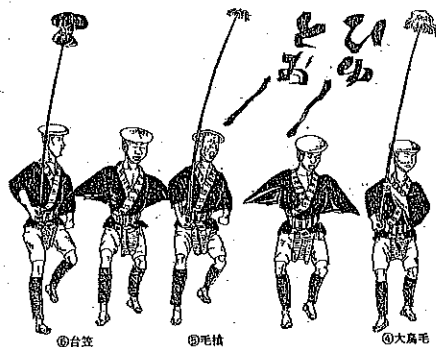
館林藩士岡尾家(100石)<天徳寺浄品院144・145>

- 隊列
- 王の葬儀一行
- 三尾旗二本
- 勝利の赤太鼓一六〇個
- 勝利の銀太鼓二〇個
- 勝利の金太鼓二〇個
- 笛と戦陣の太鼓の指揮者
- 外国風ラッパ吹奏者二〇名
- シヤムラッパ吹奏者二八名
- 法螺貝吹奏者四名
- 七層傘二本、五層日傘と四層日傘六本
- 太刀持三名
- 僧侶の扇持一名
- 經典読経の皇子搭乗用王室乗用車
- 太刀持四名
- 王の傘、日傘、扇
- 槍持のインドラの代理者八名
- 槍持のブラフマーの代理者八名
- 文官護衛兵
- 傘持
- 太刀持六名
- 大盃柁車、骨董の運搬
- 兵士二〇〇名、王室の六頭立馬車牽引
- 王の傘および日傘、扇
- 金銀装飾の樹木を運搬の
- インドラとブラフマーの代理者一六名
- 七層傘二本、五層日傘一〇本
- 日傘八本
- 王の所持品持持の宮廷員二名
- 太刀持四名
- 小姓三二名
- 馬丁付軍馬四頭
- ブラチャティボック王の一行
- 王室警士八名
- 猿の旗とガルドの旗
- 王、徒歩
- 王の傘
- 副官一〇名
- 王家の皇子
- 外国の代表者
- 政府高級官僚
- 軍樂隊

タイ・ラーマ六世の葬儀行列 (1925年)



20世紀の画家が描いたバリ島首長の伝統的葬儀行列



①台笠 ②毛楯 ③大鳥毛



④先指 (扶箱) ⑤先払



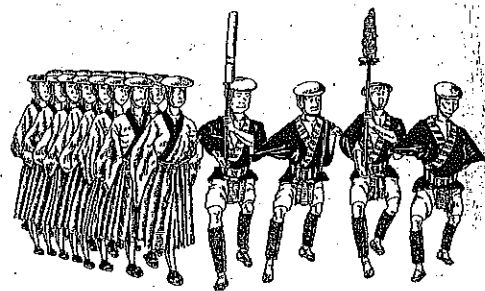
⑥通見



⑦若衆 ⑧乗物 (湯殿) ⑨先遣僧



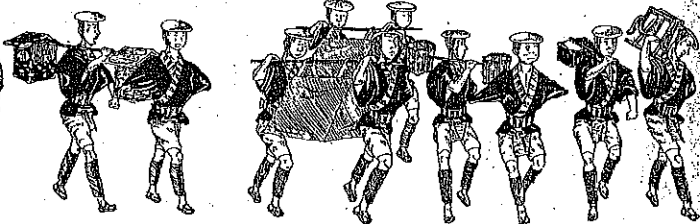
⑩花車 ⑪打物



⑫徒士 ⑬曲長柄 ⑭立傘



⑮卒頼 ⑯列方 ⑰跡押



⑱雨皮川 ⑲合羽團 ⑳鉢箱 ㉑曲傘



㉒勝簀 ㉓雨長柄 ㉔朱長柄 ㉕寄杖 ㉖櫓の台



㉗ツグシラ ㉘後僧 ㉙道練僧 ㉚蓮華 ㉛四花 ㉜高張提灯



㉝町内および旗の旗 ㉞先払 ㉟臨海師



㊱臨海師 ㊲後僧 ㊳先払



㊴供養菓子 ㊵放鳥籠 ㊶一般会葬者の列 ㊷道族 ㊸城主 ㊹興 (現村) ㊺シキミ